

機関番号：15401
 研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2008～2010
 課題番号：20402065
 研究課題名（和文） 教員養成におけるアセスメントモデルとしての「電子ポートフォリオ」に関する調査
 研究課題名（英文） Survey on ‘Electronic Portfolio’ as Assessment Model for Pre-Service Teacher Education
 研究代表者
 松浦 伸和（MATSUURA NOBUKAZU）
 広島大学・大学院教育学研究科・教授
 研究者番号：30229413

研究成果の概要（和文）：

本研究は、教員の質を保証するために、新たなアセスメントモデルとして「e ポートフォリオ」を導入することを目指した調査をすることであった。実際には以下のことを行った。(1) 海外において「e ポートフォリオ」を教育養成や教員実習に取り入れていたり、教員養成スタンダードなどを開発している欧米、近隣アジア諸国の大学を訪問して、その内容を調査した。(2) その調査結果を基に、実際に電子ポートフォリオを開発して、それを活用する教育実習や教員養成の新たなアセスメントモデルを提唱した。

研究成果の概要（英文）：

The aim of this project is to survey the ‘Electronic Portfolio’ as a new assessment model for the introduction into the pre-service teacher education.

First, we visited some forward-looking universities in US, Europe and Asia which have already developed portfolio assessment or have constructed certain system for the assurance of teachers’ quality. On the basis of the survey we have developed ‘Teacher Education Hiroshima University Standard’ and Electronic Portfolio for our university. The new assessment system has been proposed for pre-service teacher education.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	4,400,000	1,320,000	5,720,000
2009 年度	5,000,000	1,500,000	6,500,000
2010 年度	3,200,000	960,000	4,160,000
年度			
年度			
総計	12,600,000	3,780,000	16,380,000

研究分野：英語教育学

科研費の分科・細目：教科教育学

キーワード：海外調査、教員養成、ポートフォリオ評価、教育実習、教職スタンダード

1. 研究開始当初の背景

平成 18 年 7 月に公表された中教審答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」の中で「教職課程の質的水準の向上」が提唱され、『「教職実践演習（仮称）」の新設・必修化』や「教育実習の改善・充実」等、5 点

の方策が例示されている。とりわけ教育実習は、「実践的指導力の育成のみならず、学生自らが教職への適正や進路を考える場として大きな役割が期待」されている。にもかかわらず、わが国の教育実習には、以下のような問題点があると指摘されている。①実習内

容の偏りや不備、②大学と実習校との緊密な連絡の欠如、③実習生が身に付ける技能や知識等、ならびにそれらの具体的な到達目標の未整備、④身につけるべき能力や適正、意欲等の評価方法や評価基準の不明確さ。

これらの中でも③④の問題を解決する糸口として、欧米諸国で採用されている「ティーチング・ポートフォリオ（以下、「TP」と略記）」が大いに参考になりそうである。「TP」とは、教師の教育実践の履歴を記録するとともに、その効果がどうであったかを学習者の学習サンプルによって実証し、反省によって、さらなる授業改善や授業力量形成を目指す道具である。すでに米国においては、現職教師や教職志望学生の「実践的指導力」を示すために作成する「TP」として活用している。またそれらを活用した結果、実習生らの反省的実践（リフレクション能力）への志向を高め、さらに教員養成カリキュラムでの成績判定や教員資格修得までの基礎資料として利用されているとの報告がある。最近では、「TP」のコンテンツをデジタル化し、インターネットを介してWeb上で作成・閲覧できる「電子ポートフォリオ（以下、「eポートフォリオ」と略記）」が主流になっている。

わが国においても教員養成において「TP」の導入や活用をしている例や「eポートフォリオ」の導入例の紹介を散見することはできるが、残念ながら、それを含めた体系化された教員養成のアセスメントモデルは開発されていない。

2. 研究の目的

本研究は、教員の質を保証するために、教員養成において新たなアセスメントモデルとして「eポートフォリオ」を導入することを目指して海外諸国の調査を行うことである。本研究の目的は以下の通りである。

- (1) 海外において「eポートフォリオ」を教育養成や教員実習に取り入れている先駆的な大学を訪問して、「eポートフォリオ」の開発方法（内容や作成方法）、運用方法、その成果などを調査する。
- (2) 教育実習を中心に、教員として求められる実践的指導力の下位能力や到達点に関して調査する。
- (3) それらの調査結果を基に、教育実習や教員養成の新たなアセスメントモデルを提唱する。

3. 研究の方法

本研究は3年間の継続研究であったので、年度ごとに研究の方法をまとめておく。

<平成20年度>

研究の初年度は、eポートフォリオの開発方法や運用方法など、その全体像を把握する必要があったので、研究目的(1)を行うため

に、アメリカを中心に調査・研究を行った。

アメリカにおける教員養成は、学部段階で行う場合と大学院段階で行う場合がある。また、教員として求められる資質や能力などに関しては、州ごとに定められているスタンダード（通常10程度）によって規定されている。その到達度の測定にポートフォリオを活用している大学が多い。

本研究では、多くの情報が得られるように、調査は3度に分けて行った。

調査1：9月下旬にカリフォルニア大学バークレー校とコロンビア大学を訪問した。

調査2：2月にコロンビア大学でさらなる資料収集をした。

調査3：ミシガン州立大学とサンディエゴ大学を訪問して情報収集を行った。

情報に関しては、いずれも以下のような内容を中心に収集した。

- ① 教師に求められる実践的指導力の要因
- ② eポートフォリオの開発方法（内容や作成手順）
- ③ eポートフォリオを用いた実践的指導力の評価方法
- ④ 学生の変容や成果

<平成21年度>

2年目は、海外での先進的な事例として、シンガポールならびにフィンランド、イギリスで前年度と同様の調査・研究を行った。シンガポールは小国のためNIEで一括して教員養成を行い、質の高い教育を提供している。フィンランドも教員に修士学位を求めるなど教員養成には定評がある。

調査1：5月上旬にシンガポールで唯一教員養成を行っているNIEを訪問して調査した。

調査2：9月と2月にフィンランドのユバスキュラ大学とヘルシンキ大学を訪問して調査した。

調査3：1月にロンドン大学を訪問して情報収集を行った。

その内容は前年度を踏襲した

<平成22年度>

本研究の最終年であるため、以下の内容を行った。

調査1：中華人民共和国（以下中国と略称）の調査

教育状況が似ているアジアの調査として、近年発展のめざましい中国を訪問して調査した。9月に北京師範大学と首都師範大学を訪問して、教員養成の質保証に関する意見交換を行った。中国でも教員に求められる資質についてスタンダードが作成されつつあるとの情報を得た。

調査2：中国の調査2

12月に、スタンダード作成など教員養成の質保証制度を中心的に行っている華東

師範大学を訪問して具体的に調査した。教育実習や教員養成の新たなアセスメントモデルの提唱：

各国における調査結果をもとにわが国の教員養成における実践的指導力の構成要素を検討し、それを基に「教員養成広大スタンダード」を作成して新たなアセスメントモデルを提唱した。

さらに、それを評価するための手段として「e ポートフォリオ」を開発して本学に導入した。

研究成果の評価：

これまで行った3年間の研究成果の評価のため、ミシガン州立大学と華東師範大学を再訪して、関係者と意見交換を行った。いずれの大学でも本研究の成果は高い評価を受けることができた。

4. 研究成果

本研究で調査した内容をまとめるが、紙幅の都合上、ポートフォリオを積極的に活用しているアメリカ、イギリス、フィンランドに絞って報告する。

4.1 アメリカの調査結果

アメリカにおける調査結果については、ウィスコンシン大学マジソン校(UW)の例を中心に述べる。

ウィスコンシンでは州政府が10項目からなる教員の満たすべきスタンダードを提示したが、UWはこれに加えて独自に15のスタンダードを作成した。以下のものである。

- ①子どもたちの学習、発達について理解している。
- ②学校教育が行われている社会的背景を理解している。
- ③学問領域(discipline)についての洗練された知識を身に付けている。
- ④特定の教科における教育方法についての知識を身に付けている。
- ⑤教育上の選択を説明することができる。
- ⑥学校と地域をつなぐことができる。
- ⑦様々な形のコミュニケーションを理解し、それに適応することができる。
- ⑧様々な評価方法を用いることができる。
- ⑨学習環境を整備することができる。
- ⑩様々な教育方法を用いることができる。
- ⑪テクノロジーを利用することができる。
- ⑫すべての生徒に配慮することができる。
- ⑬自らの教育実践について内省することができる。
- ⑭保護者や地域と良好な関係を保つことができる。
- ⑮法的な権利と責任を理解している。

学生は各セメスターに割り付けられたスタンダードに示された能力を付けたことをポートフォリオの中で示すことになってい

る。その証拠(artifact: 授業の指導案、授業風景のビデオ映像、授業で用いたワークシートなど)を選定してポートフォリオに含め、またなぜそれらの証拠が当該スタンダードを満たしているかについての解説(warrant)が求められる。

ポートフォリオの詳細は以下通りである。学生が作成するトップページには、学章や名前の下に以下の項目がデフォルトで設置されている：autobiography(自己紹介)；educational philosophy(教育哲学)；teaching and learning(教育実践と学習)；working for diversity(多様化への取り組み)；standards(スタンダード)。それぞれの項目の中に書き込む内容やデザインは学生にまかされている。

自己紹介では写真やこれまでの学歴、職歴などを記述している。教育哲学は、1セメスターでの授業時に書かせ、以後すべてのセメスターで書かせることになっている。

教育実践と学習では、教育実習時に作成した学習指導案や作教材、生徒の学習の記録、授業のビデオ、スタンダードとの関係などに加えて、実習以前に教科の指導法の時間に課されたレポートや課題なども併せて載せている。スタンダードでは、上で述べた15のスタンダードのそれぞれを満たしているという証拠を記載することになっている。

なお、電子ポートフォリオの作成についての指導は、大学教員ではなくスーパーバイザーが行っており、評価も担当する。

スーパーバイザーは担当する学生について、スタンダードごとに評価する。その際、学生が作成のポートフォリオを参照できるようになっている。それぞれ Exemplary(特に優れている)、Satisfactory(満足できる)、Insufficient(不十分である)の3段階で評価を下す。最終的にはすべての項目について Satisfactory 以上で、そのうち5項目以上は Exemplary でなければならない。

また、ミシガン州立大学におけるポートフォリオについては以下の通りである。

ポートフォリオ作成の初段階として、1年間に行ったあらゆる活動の記録を残す。たとえば学校現場では担当クラスのファイルがあり、指導案や教材、授業の振り返りなどあらゆる情報を残すことになっている。それに加え、大学の授業で読んだもの、書いたもの、議論した内容、そこから学んだことなどを全て情報源として記録しておく。

次の段階は、プログラム規準への到達度を示すために情報を整理することである。膨大な情報を目的に沿って簡潔にまとめ、教師としての自らの成長過程を効果的に提示する能力が要求される。形式は特に定められていないが、内容に関する参考例が示されており、以下の通りである。

- ・背景の情報（履歴書、ホームページ、指導現場に関する情報など）
- ・学んだこと（指導と成長に関する考え、カリキュラム、子どもの学習の分析など）
- ・指導内容やその振り返り（単元目標や指導計画、作成した教材、授業案、子どもの評価、生徒のニーズに応えた証拠など）
- ・専門書類（成績証明書、推薦書、礼状など）
整理されたポートフォリオは効果的に自らの成長が記されているため、その後の就職活動（勤務する学校を探す）において有効に活用されている。

4.2 イギリスの調査結果

ロンドン大学では、基準に到達していることを評価する判断材料を集積しておくために「評価記録ファイル(Assessment Record File: ARF)」を用いている。ARFは主として学校体験(教育実習に相当するもので、12週間の実習を2回行う)を通して集積する。

その内容を述べる前に、指導教員が記述しなければならないものをまとめておく。

●授業観察記録

実習生の授業を、1つの特定の規準や焦点に照らして観察して、そこで行われた内容を客観的に記述する。実習生の授業の評価というより授業後の討論に使用することが主目的である。実習期間中に公式なものを5回行って記録しておく。

●討論の記録

週に1回1時間、教科の指導教員ならびに実習系の教員と討論をする。1週間の指導や授業計画でどのあたりが伸びたか、次の目標などを共有するために話し合う。その内容を、テーマ、討論のポイント、問題点と解決方法などに分けて簡潔に記録する。

●教壇実習の観察のまとめ

教科の指導教員が実習生の授業を観察して、伸びや問題点を記述する。記録用紙には、実習生の名前、教科、日時、クラス、テーマなどに加えて、評価規準となっている教師に必要な資質、専門的な知識と理解、専門的な技能に関するコメント、さらなるコメント、課題や目標(Targets)を記入する欄がある。これは、どのレベルにあるのかを評価するのに重要な段階であり、実習期間中の適切な時期に公式に5回行う。実習生はそれを読んでフィードバックし、次の目標を立てなければならない。

●実習校からの報告書

QTSのスタンダードに照らして、実習生を総括的に評価したもの。教師に必要な資質、専門的な知識・理解、専門的な技能の3点から評価する。

資質ならびに専門的な知識・理解については、コメント(評価基準に照らした達成度)、伸ばすべき目標、まだ伸ばす機会のなかった

評価基準の領域を記述する。専門的スキルについては、計画の立案、指導能力と共同作業、評価に分けて同じ内容を記述する。

また、2番目の学校ではそれに加えて、Very Good、Good、Satisfactory、Poor、Fails to meet Standardsの4段階での総括的評価をしなければならない。

●次の実習校での目標

最初の実習校のみが行うもので、実習生の指導力や専門的資質などについて優れている点とさらに伸ばすべき点を、4点以内にまとめて、授業観察記録、観察のまとめ、指導教員の観察などから証拠を添えて記載する。

●継続して伸ばすべき目標

2番目の実習校のみが行い、実習生の指導力や専門的資質などについて優れている点とさらに伸ばすべき点を、各4点以内にまとめて、授業観察記録、観察のまとめ、指導教員の観察などから証拠を添えて記載する。

次に、大学で実習生を総合的に評価する際に「証拠」として用いるもののうち、実習生が集積しておかなければならないものについて記載する。

1 単元計画

授業を公式に観察された中の2単元の指導案、教材、評価計画などを記述する。

2 学校特定研究のフィードバック

学校特定研究とは、実習生が共同で、教科を越え学校にとって有益な小規模の研究を行うことである。それぞれの実習生は何らかの貢献をして、最終的にプレゼンテーションをする。その一部として実習生は評価記録ファイル(Assessment Record File)の作成に携わり、ほかのグループの実践にフィードバックを与えなければならない。

3 ティーチングアシスタント ログブック

実習生は少なくとも1回は、できれば最初の学校で自分の専門教科以外の授業のティーチングアシスタントをする機会を持つ。その授業や批評会の記録をする。

4 実習校からの報告書、それに対する返答ならびに次の実習校での目標

実習生は、実習校からの報告書、指導教員の授業観察記録などを基にして、最初の学校で付けた力、次の実習校での課題をそれぞれ4点にまとめる。書いた後で大学の指導教員に見せて同意を得なければならない。

5 教育実習の振り返り

4を書いた後で、自分の学びについて1,000語以内で批判的に振り返る。実習の半分を終えた段階と教師として1年目を始める前、すなわち2回の実習ともに終えた段階で書かなければならない。

記述は、学校や教科や生徒の特徴など状況(語数に含めない)、自分の成長に影響を与えた要因、実習期間での成長、次の実習で伸ばすべき点などをまとめる。

ロンドン大学のものは電子版ではなくペーパーポートフォリオである。

4.3 フィンランドの調査結果

ユバスキュラ大学では、「ポートフォリオは教員養成課程のいくつかの科目ならびに教育実習を通して行ったアカデミックな学習に加えて、自分自身の学習や指導経験を基に作成する」という考え方の下に作成している。完全に授業科目と対応させていることも大きな特徴である。科目ごとにポートフォリオに蓄積する内容をまとめておく。

なお、ポートフォリオの内容は決められているが、作成の方法は各学生に任されている。デザインに凝ったり、電子版で作成している学生もいるようである。

● 1年次

教育入門：

- ・「自分の長所と短所」の結果を基にした分析
- ・自分の学習歴（2～3枚）どのように学んだのか、どんな学び方が良くて、どんなのが悪かったのか。
- ・その教科が得意な学生が入学するので、なぜ簡単だったのかを分析させる。
- ・現在は、学び方を教えなければならない。そのためにも学び方を振り返らせる。

教育心理の基礎：出された課題

教育社会学の基礎：人生で重要な学習経験、異質な（移民や障害者など）グループでの学習経験をテーマにしたエッセイ

● 2年次

チュータリングと指導法入門：教育哲学

入門実習：自作の教材作成など選択した課題

● 3年次以降

教師の倫理と教育哲学：これまでの自己評価、教育哲学

対話と集団力学：障害者のいる教室などについて書いた本をグループで読んで、討論する。その内容をレポートする。加えて、他文化プロジェクトの最終報告書を書く。

教師、学校と社会：スクールプロジェクト（メディアプロジェクトなども含む）の最終報告書を書く。

高度な指導法知識：第2回目の「自分の長所と短所」の結果を基にした分析

基本実習・応用実習：

教材、生徒からのコメント、ほかの実習生からのコメント、先生からのコメントなど
適応実習：履歴書、教師になって5年間の研修計画（何をどのように学ぶのかなど）

反省的实践者としての教師：これまでの学習に関する最終報告書

評価は、教員養成全体を通して学んだ結果、自立した教師として免許状を与えるかどうか、すなわち「合格」「不合格」のみで行われる。「優れた成績で教師になった」「悪い成

績で教師になった」という区別をしても何の意味もないなどの理由である。

4.4 新たなアセスメントモデルの提唱

上で述べたような調査結果を基にして、わが国の教員養成で活用できる新たなアセスメントモデルを開発した。

まず、スタンダードとして、以下の8つを提唱した。

規準1：教科の指導内容に関して十分な知識や技能を獲得している。

規準2：学習や発達に関する理解を統合した指導計画を立案することができる。

規準3：教材や指導法などについて知識を持ち、授業実践ができる。

規準4：児童・生徒の学習を評価することができる。

規準5：児童・生徒を理解し、信頼的な関係を築いて指導することができる。

規準6：学級経営などを理解している。

規準7：学校や教育を取り巻く基礎的な知識を獲得している。

規準8：教育者に求められる資質や能力（使命感、教育的愛情、対人関係能力など）を備えている。

次に、それぞれの規準に対して3段階のルーブリックを開発した。

そして、以下のような内容を含めるポートフォリオを開発した。

<フロントページ>

自己紹介、自分の学習歴

<規準1>

それぞれの科目で、教科の指導内容のうち、ある単元に関する知識をどの程度獲得しているかをテストした結果

<規準2>

大学の授業で書かせた、1時間の授業の指導案、同じく1単元の指導計画

実習における単元の指導案ならびに1時間の指導案を、前後期それぞれ2回分

<規準3>

大学の授業で測定した教材に関する知識、同じく指導法に関する知識

実習における授業実践の記録（指導案、指導教員からのコメント、観察者からのコメントなど）を、前後期それぞれ2回分

<規準4>

大学の授業で書かせた、1時間の授業の評価計画、同じく1単元の評価計画

実習における単元の評価計画ならびに1時間の評価実践を、前後期それぞれ2回分

<規準5>

それぞれの科目で、児童・生徒の興味や関心に関する知識をどの程度獲得しているかをテストした結果

実習校における生徒との関わりを観察した記録

<規準6>

それぞれの科目で、学級経営に関する知識をどの程度獲得しているか、をテストした結果。またそれをもとに学級経営案を書かせた記録。

実習中に作成した学級経営案

<規準7>

それぞれの科目で、教育に関する法令や現在の教育状況に関する知識をどの程度獲得しているか、をテストした結果。

実習校の状況をどの程度把握しているかを記述

<規準8>

教師としての哲学を教職科目において、2年次、3年次の最初に書く。

<共通>

それぞれ実習系科目での「授業観察の記録」科目ごとに2つ取り出して書く。

教育実習系科目を終えた段階で書く「〇〇実習を終えて」のレポート

まとめとして「教師としての4年間の成長ならびに教師としての今後の展望」のタイトルでレポート

この新たなシステムは、平成23年度より広島大学の教員養成全体に導入する。今後はその成果を検証したい。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計8件)

- ① Nobukazu MATSUURA etc, Exploring Goals to be achieved in Practice teaching of Prospective English Teachers, *ARELE*, 22, 査読有り, 2011, 127-136
- ② 池野範男ほか, 教師の授業力向上, 社会科教育実践ハンドブック, 明治図書, 査読無し, 2011, 印刷中
- ③ 松浦伸和, 岩田昌太郎, 吉田裕久, 棚橋健治, 古賀一博, 筆谷聡史, 五年制教員養成のシステム構築, 広島大学教育学研究科共同研究プロジェクト報告書, 9巻, 査読なし, 2011, pp. 89-103
- ④ 嘉数健吾, 岩田昌太郎, シンガポールにおける教員養成と現職研修の特質—教員養成を中心としたわが国への示唆, 中国四国教育学会誌, 7巻, 査読あり, 2010, 1-10
- ⑤ 松浦伸和, 若元澄男, 角屋重樹, 岩崎秀樹, 池野範男, 棚橋健治, 吉田裕久, 岩田昌太郎, 「到達目標型教育」を実現するポートフォリオ評価の開発, 広島大学教育学研究科共同研究プロジェクト報告書, 8巻, 査読なし, 2010, pp. 151-165
- ⑥ 岩田昌太郎, 松浦伸和, 角屋重樹, 吉田裕久, フィンランドの教員養成における質保証の実態—ユバスキュラ大学のポートフォリオを事例として—, 学校教育実践学研究, 16巻, 査読あり, 2010, pp. 117-126
- ⑦ 松浦伸和ほか, 「特色ある教育実習プログラム」の実施に関する研究, 広島大学学

部・附属共同研究紀要, 38巻, 査読なし, 2010, pp. 19-25

- ⑧ 松浦伸和, アクションリサーチを用いた資質・能力の形成, 日本教科教育学会誌, 32巻, 査読あり, 2009, pp. 89-92

[学会発表] (計2件)

- ① 松浦伸和ほか, 英語科における教育実習の到達目標の設定, 第36回全国英語教育学会 大阪研究大会, 2010.8.7, 関西大学
- ② 松浦伸和, アクションリサーチを用いた資質・能力の形成, 日本教科教育学会金沢大会, 2009.10.11, 金沢大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松浦 伸和 (MATSUURA NOBUKAZU)
広島大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号: 30229413

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

- 若元 澄男 (WAKAMOTO SUMIO)
広島大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号: 50240453
- 岩崎 秀樹 (IWASAKI HIDEKI)
広島大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号: 50116539
- 吉田 裕久 (YOSHIDA HIROHISA)
広島大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号: 80108373
- 池野 範男 (IKENO NORIO)
広島大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号: 10151309
- 棚橋 健治 (TANAHASHI KENJI)
広島大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号: 40188355
- 岩田 昌太郎 (IWATA SHOTARO)
広島大学・大学院教育学研究科・講師
研究者番号: 50433090
- 角屋 重樹 (KADAYA SHIGEKI)
国立教育政策研究所・基礎研究部・部長
研究者番号: 80136027
- 猫田 英伸 (NEKODA HIDENOBU)
島根大学・教育学部・講師
研究者番号: 80452598

(4) 研究協力者

筆谷 聡史 (FUDETANI SATOSHI)
広島大学・大学院教育学研究科・学生